審査員賞
仲井美祐「おいしいことばレストラン」

おいしいことばレストラン

和光高等学校　三年　　仲井　美祐

家へ帰る途中、駅のうらの細い道の所に新しい店が建っていた。「おいしいことばレストラン」看板にはそう書かれていた。

メニューを開くと、「ありがとうサンドイッチ」「だいじょうぶカレー」「おめどうパフェ」など、どれも不思議なものばかり。私は興味本位で「ありがとうサンドイッチ」を注文した。少しすると、柔らかい雰囲気の店員さんがまるで魔法のような声で「おまたせしました」と私の前へ料理を運んできた。パンの焼けたいい香りと魔法の声が私を包み込んだ。食べた瞬間、旨に温かくて優しい気持ちが広がっていったのが分かった。そして家に帰ってもその温かさは消えず、なぜか自然と家族や友達へ「ありがとう」と感謝のことばがあふれていた。

やっと気づいた。あの店のメニューのことばはただ食べるだけではなく、自分の胸の中で育ち、周りの人に届く、「ことばの栄養」になっていたのだ。

それからしばらく経ったある日のこと、私は母と喧嘩をした。家を飛び出した私の足はあの店の前へ向かっていた。店員さんに案内され席につきメニューを広げた。その時、隣の席から「さようならケーキを一つ下さい」と、か細い男性の声がした。今にも泣きそうな顔で届いたケーキをゆっくりと味わっていた。そしてすべて食べ終え、席を立つと、男性は少しほほえみながら涙を拭い「ありがとう」と店を後にした。きっと彼も心からの「さようなら」が言えたのだろう。

彼の背中を見送った私は再びメニューを眺めピッタリの料理を注文した。「おまたせしました、ごめんなさいスープです」

目を閉じてそっとスープを飲み干し、あたたまった胸で家へまっすぐ帰ることにした。

審査員賞
仲井美祐「おいしいことばレストラン」

審査員講評　************************

読んでいてこちらも胸がじんわりあたたかくなるお話でした。特に、他のお客さんの行動を「私」がさりげなく見ていて、無意識に影響を受けながら心が動く瞬間が描かれているのが素敵です。最後はごめんなさいスープを飲んだ後、お母さんに言葉を届ける前に終わっているところがよかったです。

――　藤岡みなみ